

「瀬戸内源氏」を読む

羽地 達次

高校生の時、平安時代の文学では清少納言の枕草子と紫式部の源氏物語が双璧であると習つた。清少納言の枕草子は「春はあけぼの」というあまりにも有名な出だしで誰もが知つている。源氏物語に関しては作者が紫式部であるといふこと以外は習つた記憶がない。あつたとしても何の印象も残っていない。その後福岡の大学に進学したが、当時の進学課程はあまりにも暇であること、大学紛争で授業もほとんど無かつたこともあり、色々な本を読んだ。その頃雑誌の広告で円地文子が源氏物語の現代語訳を出版するということを知つた。早速大学生協を通じて定期購読するようとした。月一回の出版で、ほぼ一年かけて出版された。箱入りの「カッコ良い」本であった。といつても第一巻のみ

最初の部分を読んだだけですぐに挫折してしまつた。大病を患つたことと専門課程に入り講義と実習が忙しくなり重厚な本を読む時間が無くなつていた。それでも何時かは源氏物語を読んでみたいという思いで定期購読を続け全十巻全てを揃えた。五十年以上前のことである。その後十回以上上の引っ越しをしたので円地源氏はどこかに消えてしまい手元には残つていらない。

縁あつて二十五年前から徳島に住むようになり、二〇一六年に無事定年を迎えた。現役時代から、せつかく徳島に住んでいるので徳島ゆかりの作家を知つておきたいと思い、瀬戸内寂聴とモラエスに絞り、本職の合間に両者に関する書籍を読んだ。幼少期の寂聴がモラエスに会つた

ことがあるといふこともどこかで知つた。また円地文子が源氏物語の現代語訳に取り組んでいた時、寂聴と同じアパートに住んでいたこともどこかで読んだ。定年になり五十年前に挫折した源氏物語を瀬戸内寂聴の現代語訳で読むことを決心した。早速徳島の本屋を当たつてみたが店頭には当該の本は無く、どの店でも注文してから取り寄せなければならなかつた。変なこだわりがあり、自分で手に取つてから購入したかつた。定年後一年間は公私ともに忙しく、県外に旅行する機会が多く、旅行先で本屋巡りをした。各地の書店にも在庫はほとんど無かつた。それでもいくつか都市を回るうちに全十巻全てを手に入れた。青森、仙台、宮崎、北九州、松江で入手したと記憶している。特に印象に残っているのは松江の小さな書店で手に入れた巻七と巻八であった。後で気が付いたことに、巻七は既に手に入れていたので我が家には巻七が二冊もある。巻七を開いてみると二〇一七年四月一日発行の足立美術館の入館券がしおりとして挟まっていた。その時に購入したものだ。その本は二〇〇八年三月発行の第二刷であつたので松江では新刊として十年近くも本棚に眠つていたことになる。

二〇一七年の春、ある居酒屋「店主曰くロックカフェー」

で何気なく瀬戸内源氏の話になり、徳島の本屋には無いこと、苦労して手に入れたこと等を話題にしていると、直ぐ横にいた初対面の女性から自分に相談したらいくらでも進呈したのにとの話があつた。もうすでに手を入れていたのでお会いするのが遅かつた。あとで知つたことであるが寂聴ゆかりの方であつた。身近に寂聴ゆかりの方がいるのもさすが徳島と実感した。ちなみに現在では徳島の大手書店で「瀬戸内源氏」の文庫版は十巻全て揃つている。巻一は三〇刷、巻二は三七刷、巻十は十刷である。源氏物語を読んでみたいという気持ちは多くの者が持つてゐるが、最後の巻まで手に取つて読んだ人が少ないことを物語つてゐるよう興味深い。

定年後半年が経ち時間に余裕ができたので、昼の一時間と寝る前の何時間かを瀬戸内源氏を読む時間に当てた。巻一から読み始めると、光源氏をはじめとする天皇関連の人事物に関する記述が重々しくて違和感があつたが、物語の展開が面白くてついていきやすく比較的読みやすかつた。女学生時代の寂聴が寝る間も惜しんで読んだ気持ちが少しはわかるような気がした。文中に出てくる和歌の現代訳が名訳でしかも全体を通じて五行に体裁が整えられていること

にも感激した。紫式部にしても瀬戸内寂聴にしてもよくこれだけの和歌を考え付いたり、正確に文学的に訳したりできたものだと感激した。須磨下りで挫折することなく、半年くらいかけて全十巻を読み終えた。円地源氏を知つてから五十年かけての達成で、自分でもよく続けられたものだと感激している。源氏物語に興味を持ち、既に開講されていたNHKの講座に二〇一六年の秋から通い原文での精読も始めた。その後徳島大学の公開講座や文学書道館での講座にも参加してきた。源氏物語を讀んでいると当時の時代背景や政治の流れ等をも知ることができ、物語の面白さだけではなく人生の達成感や充実感も感じられる。またついでに手に入れた「女人源氏物語」や源氏に関するいくつかの本も合わせて読んでいる。

現在ではみかけないが何年か前に仏具店の横で紫色の白衣を着て軽く微笑んでいる寂聴の写真を見かけた。やはり徳島ゆかりの方だと再認識した。瀬戸内寂聴記念会が毎年「寂聴」を発行していて今回が第三号である。縁あって記念会会員番号第一〇〇号の会員になった。幽霊会員で会の活動には全く参加していないが源氏物語を瀬戸内寂聴の現代語訳で読むきっかけになつたことを記してみた。